

第五章 光と影

「フロイデンへ赴かれるのは思い止まって頂けませんか」

その夜、およそ四ヶ月ぶりにアンネローゼとの対面を果たした時、ラインハルトが最初に口にしたのがその言葉だった。アンネローゼの隠棲するフロイデン山中の山荘は、冬期には厚い雪に閉ざされる。警備面のみならず、アンネローゼの健康面を慮っても、この先、何年も彼女に厳冬期を過ごさせるわけにはいかない。冬期だけでも山麓に引き移ってはもらえまいか……むしろ懇請と呼ぶに相応しいほどの言葉を尽くし、ようやくアンネローゼを領かせたのはキルヒアイスだった。

フロイデン山麓のグリューネワルト伯爵領……現時点でのアンネローゼの称号によれば大公妃領に新たな居館が完成したとの報告が入ったのは数日前のことである。

「もう夏になっているのよ。山荘へ戻ってはいけなにかしら？」
アンネローゼはそう希望したが、政治的な判断はともかく、ラインハルトにとって姉との別離は感情的には受け入れがたいことであるのは自明だった。

「ご希望は分かりますが、一度お目にかかってお話しさせてください」

回答の代わりの懇請に、今回はかりはアンネローゼも首を横には振らなかった。

「夕食を用意しておくわね。余り遅くならないようにしてもらえ

と嬉しいけれど、遅くなるようなら連絡をお願い」

キルヒアイスが最後の書類の決裁を終えて執務室を出た時、午後九時には数分を残していた。帝国大公の退室時間としては記録的な早さと言えた。ほぼ同時刻にはラインハルトもまた、皇帝としての執務を終えているはずだった。文理科大学キャンパスにおけるテロ事件は、片付くどころか更に状況に煩雑さを加えながら奇怪な形相を見せ始めていたのだが、帝国の最高統治者たる二人の視点から言えば、数多い治安上の一事件といつに過ぎない。過度に注意を注ぐべき理由は、少なくともこの段階で見出し得なかったのも事実である。

南苑（シュート・ガルテン）につながる渡り廊下の一つには、アンネローゼの滞在に合わせて二重のドアを備えた警備兵詰め所が設けられている。普段はラインハルトやキルヒアイスと謂えども無許可での通行は許されない。もつとも、誰がラインハルトの通行を許可しないかと言えば、それは皇帝たるラインハルト自身なのだから、第三者的な視点からは滑稽といえは滑稽である。だが、アンネローゼがそれを必要と主張し、自身がそれを納得している以上、敢えて滑稽さを受け入れるのもラインハルトの統治者としての生真面目さだった。

詰め所の手前でキルヒアイスは足を止め、眉を蹙めた。分厚いドアの前に佇立し、姿勢を正して彼を出迎えたのはラインハルトではなかった。

「皇帝陛下から御伝言です」

次席副官のリュッケ少佐だった。

「御伝言？」

「急用が入ったので、三〇分ほど遅れる。先に行っていて欲しいと仰っておいででした」

「例の事件で何か新たな情報が入ったのですか？」

「少なくとも小官は聞いておりませんし、陛下もとにかく三〇分ほど待つていてくれと伝えてくれ、とだけ」

「……わかりました。御伝言、承知したと復命願います」

敬礼し、踵を返すリュックを見送ってキルヒアイスは僅かに迷った。伝言通り、アンネローゼの許でラインハルトの到着を待つても良い。アンネローゼが西^{ウェスト・ガイズ}の住人だった頃、アンネローゼと共に過ごす時間の長さを常に競い合つのも彼らにとつての楽しみであり、喜びでもあったものだ。

「何だ、キルヒアイス。先に行つていなかったのか。おれだったらさつさと姉上のところに行つているところだったぞ」

詰め所の前で彼を出迎えた赤毛の親友を前に、伝言通りに三〇分ほどの遅れで姿を現したラインハルトは、しかし、言葉ほどには意外そうではなかった。

「久しぶりに直にお会いできるのです。ご一緒の方が良いと思いましたが」

「そっか……」

キルヒアイスの視線はラインハルトのそれよりも僅かに高い位置にある。見上げたラインハルトの視線に何かしら硬いものを感じ、キルヒアイスは違和感を抱かせた。

「ラインハルトさま、なにかあったのですか？」

「あ……つむ。つまらない報告だ。緊急と言っているくせにまったく緊急ではなかった……時間が惜しい、行くっか」

完全武装の装甲擲弾兵が最敬礼で出迎え、厚いドアが開かれる。キルヒアイスは胸の痛みを感じる。アンネローゼ自らの希望であり、同時に彼女の身の安全のためやむを得ないとは言え、最大級の対戦

車ビーム砲ですら貫通不可能なほどのドアで外界から隔てねばならないようないかなる理由がアンネローゼにあるといつのだらうか。フリードリヒ四世の寵姫となったのは彼女の意思ではない。僅か一五歳で強いられた選択に対して、そこまでの責任を負わねばならないのか。責任があるとすれば、それはゴルドンバウム王朝そのものでこそあれ、アンネローゼが彼ら亡霊とともに負の遺産をどこまでも負い続けねばならないというのは余りに理不尽である。

胸の痛みはそれだけではない。アンネローゼが隠棲を続ける理由。これほどまでにして自らを世の中から隔絶せねばならないと彼女が考える理由の一つは紛れもなく彼自身にある。誤つたことをしたとは思わない。他に選択肢があつたとも思わない。痛みは、アンネローゼと重荷を分かち合うすべを得られぬことだった。

「どうした、キルヒアイス。行くぞ」

思いに囚われすぎて足が止まっていたらしい。我に返ると目前で蒼水色の瞳が微かな不審を湛えて瞬くのが見えた。

「姉上のことを考えていたのか？」

「え……ええ」

嘘ではない。応え、キルヒアイスは戸惑った。ユーモアのセンスに恵まれているとは言えないラインハルトだが、ことアンネローゼとのことになれば冗談や軽い揶揄の一つも投げつけてくるのが普通だった。この時、ラインハルトの表情に浮かんだのは戸惑いと驚き、彼の錯覚でなければ明らかな疎外感だった。無論、錯覚だと思つた。この時は。

「急ごう、随分遅れてしまった。姉上にはお前がぼつとしていたから遅れたと言つことにしよう」

ラインハルトさまが遅れたからではありませんか……返そうと

して、本能的な恐れに似た何かギルヒアイスに沈黙を守らせた。何故か言葉が形にならなかった。言葉にしてはいけないのではないか。何の根拠もない。直感だった。

新無憂宮の南苑^{ジュー・コート・ガーデン}はもともとは皇帝の一族の住まう区画であり、アンネローゼの居室も旧王朝時代の悪趣味で過剰な装飾は完全には排されていなかった。それでも、テーブルの上に整えられた食事の用意は、まるで彼らが初めて出会った下町の二画に戻ったかのような懐旧を彼らに覚えさせた。

「時間が遅いから、食事は軽いものにさせてもらったわ」

自ら厨房に入ったらしい。アンネローゼの服装は、彼女の帯びる称号……大公妃からはかけ離れたものだった。無論、ラインハルトにしてもギルヒアイスにしても、アンネローゼに大公妃などという虚名が真に相応しいものなどとは思っていない。

テーブルに着き、二人を恐縮させたことにアンネローゼ自らの給仕でスープが供され、グラスにワインが注がれる。グラスを合わせるか合わせないかの内に、ラインハルトが口にしたのが冒頭の台詞だった。

アンネローゼは僅かに訝しげに細い眉を顰めたが、『なぜ?』と反問することはなかった。

ギルヒアイスにも分かった。いつものアンネローゼとの受け答えと同じ口調を装いつつも、ラインハルトの表情も言葉の調子もほんの少しだけ違っている。他者なら気づきもしない。彼ら三人の間だけに分かる、僅かな調律の狂いに似た不協和音を思わせる響きが、ラインハルトの言葉に混じり込んでいる。

「どこへ行けというの、ラインハルト?」

「吾々はフェザーンへ移動します」

「フェザーン?」

「最終的に帝都をフェザーンへ移します。姉上にもご同行を頂きたいのです」

「スープに手をつけてね、ラインハルト。冷めてしまつと美味しくないので。お話はその後で聞かせて頂くわ……」

澄明なサファイヤを思わせる瞳が小さく動き、ラインハルトとギルヒアスを順にその中に映し出す。ギルヒアスは胸の奥に微かな、しかし、抑え切れぬ動揺を覚えた。アンネローゼの瞳は余りに穏やかで、何の感情の揺らぎも表してはいないが、その奥深くに何か烈しいもの、普段のアンネローゼが決して表に出さないもの。しかし、ラインハルトをして玉座に駆け上がらせた、天翔ける翼あるものと共有する気質が動いているのではないか。この時のギルヒアイスにはそう思われたのだ。

「分かりました……」

大人しくラインハルトは銀のスプーンを手に取り、ギルヒアスも做う。食器の触れあうほんの微かな音を除いて、静寂が室内を支配したが、三人にとって沈黙は不快ではなかった。互いの存在を確認し合つのに雑談は必要ないことを、誰もが知っていた。

「姉上の味だ。昔から、全然変わりませんね」

一〇歳の昔から、ラインハルトにとって最上の美味は姉の料理を意味した。この日、最初の料理へのコメントも一〇歳の少年のそれに変わらない。

「良かった……フロイデンでもできるだけ自分で厨房に入るようになっているの。お料理の腕を取り戻したかったから」

省略された部分がギルヒアスに痛みを感じさせる。西苑^{ウエスト・ガーデン}

時代、アンネローゼは自らが料理の腕を振るつことも制約されてい

たということだろう。無論、彼女がフリードリヒ四世に手料理を振る舞っていて欲しかったという意味ではない。後宮など、アンネローゼのあるべき場所ではなかった。後宮への幽閉は、彼女に未来への可能性を放棄させ、解放されてなお、その後の人生の選択肢に大きな制約を課しているのだ。

「腕が落ちたなんてことはないですよ。昔のまま……いや、もっと腕が上がっていると思いますよ、姉上」

「ありがとう、ラインハルト」

「おい、キルヒアイス。お前はなんだ。何で黙ってる？」

「黙ってなどいませんよ、ラインハルトさま。ええ、凄く美味しいです」

お代わりを頂けますか……少年時代に戻ってつい言い止した言葉を、キルヒアイスは慌てて飲み込んだ。

「あら、ジーク。お代わりは要らないの？」

「あ……」

見抜かれていたらしい。帝国大公、帝国軍元帥にして帝国軍最高の驍将の名を恣にする若者が、アンネローゼの前では少年のように赤くなり、スープのお代わりを注いで貰っているのだ。

「……それで、姉上」

ラインハルトも二杯目のスープを口に運びながら、さりげなく話題を引き戻した。

「さつきも言いました。いずれ近いうちに政府と軍の主力をフェザーンに移します。そうなるや、一番の懸念は姉上の身辺警護です。手が足りないということはないですが、どうしても手薄になる恐れがあります。時が至るまで身を隠していたというのが姉上のご希望なら、フェザーンでもその地を見つけないことはできません。いえ、

既にそのような地を求めさせています」

今日、文理科大学で爆弾テロが起きた。意図は不明だが、明らかにラインハルトの治世に対する挑戦と見做すべきである。そして、ラインハルトにとって最も身近な近親者であるアンネローゼが、そうしたテロのターゲットとして選択される日が来ることは、すでに想像の域を越えている。

ラインハルト 弟の熱弁に、アンネローゼは黙って耳を傾けていた。二人がお代わりの皿を空にするのを確認すると静かに席を立って自ら皿を下げ、やがて新たな皿と香ばしい香りを溢れさせる魚のソテー料理のワゴンを押して戻ってきた。

「姉上！」

「聞いているわ、そんなに大声を出さなくても聞こえているから」
鮮やかな手さばきで料理を三人分の皿に盛り分けると、アンネローゼは自席に戻った。促す視線に応じて、二人の若者も料理を口に運ぶ。ラインハルトは満足気に小さく唸り、キルヒアイスもまた異議の申し立てようのない味付けに感歎を隠さなかった。

「ジークが遠征に出るのは何時？」

アンネローゼの問いがラインハルトを驚かせた。

「……一週間後を目処にしています。早くて七月二〇日頃、遅くとも一四日には帝都を出る予定です」

一瞬、絶句したラインハルトに代わって答えたのはキルヒアイスだった。

「私がある方から離れて身を隠していることで、そうしたテロに狙われることになると言っのね」

「ですから、是非フェザーンに一緒にいらして下さい、姉上」

旧王朝の皇帝フリードリヒ四世の寵姫。その身に纏わり付いた